

令和元年6月24日現在

機関番号：24402

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02254

研究課題名(和文) 人形浄瑠璃の上演本文・舞台演出の変遷に関する研究

研究課題名(英文) Research on the transformation of Ningyo joruri scripts and staging

研究代表者

久堀 裕朗 (KUBORI, HIROAKI)

大阪市立大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：50335402

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：人形浄瑠璃は我が国を代表する伝統芸能の一つであり、2003年には「人形浄瑠璃文楽」がユネスコの無形文化遺産にも認定された(2008年に正式登録)。しかし伝承者の減少によって、芸の継承は文楽座内の単一のものとなり、その多様性は失われていく傾向にある。また地方の人形芝居(義太夫節・人形三人遣い)も、独自の芸の継承が途絶え、単なる文楽のコピーになっている場合が多い。本研究は、近世以来の人形浄瑠璃上演史を精査しつつ、特に今日に至るまでの「上演本文」「舞台演出」の変遷を解明することを通じて、現在の文楽の舞台を相対化し、人形浄瑠璃という芸能の多様性を見出すことを目指したものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、人形浄瑠璃(文楽)の「上演本文」「舞台演出」の変遷(江戸時代から現在まで)を明らかにすることを中心的な課題としているが、こうした取り組みは、伝承が途絶えてしまった演目や演出を復活させるための基礎になる作業である。実際に、本研究では、その研究成果を活かして、いくつかの演目の復活上演にも取り組んでいる。机上の文献研究にとどまらず、演目復元の実践活動を伴っている点に、特に本研究の学術的独自性・創造性があると考えられる。

研究成果の概要(英文)：Ningyo joruri is one of Japan's representative traditional theater arts, inscribed on UNESCO's Representative List of the Intangible Cultural Heritage of Humanity in 2003 (officially registered in 2008). However, due to the diminishing number of successors, the art is becoming a single style, "Bunrakuza theater", and its diversity tends to be lost. In addition, regional puppet theaters (in a form of the Japanese ballad-drama called Gidayu-bushi and the way to manipulate a puppet with three people called sannin-zukai) also become mere copies of Bunraku. This study aims to put into context the present Bunraku performances while scrutinizing the history of Ningyo joruri performances since early modern times, particularly through unraveling the changes of "Ningyo joruri scripts" and "staging" to this day, and to find out the diversity of Ningyo joruri.

研究分野：日本近世文学

キーワード：人形浄瑠璃 文楽 淡路人形浄瑠璃 義太夫節 伝統芸能

## 1. 研究開始当初の背景

人形浄瑠璃は近世初頭に成立した日本の伝統芸能の一つであるが、17世紀末に竹本義太夫が創始した義太夫節による人形浄瑠璃が18世紀以降隆盛を極め、それが今日まで伝えられた。現在は「文楽」として、財団法人文楽協会(劇団)・独立行政法人日本芸術文化振興会(劇場)による運営のもと、国立文楽劇場(大阪)・国立劇場小劇場(東京)で定期公演が行われている。

しかしその伝承は、ある意味で非常に危うい状況にある。もとは座名であった「文楽」が芸能全体を指す名称になっていることからわかるように、大正時代末からは文楽座という一劇団だけで芸が継承されるようになり、他の座に伝承されていた芸や演出の多くを失っていった。その上、第二次世界大戦後は素人の愛好者が激減して、プロを生み出していく裾野を失い、完全に文楽座単独で芸が継承される(技芸員もほとんど研修生制度によって養成される)ようになった。その結果、現状では、時を経るごとに芸の多様性が失われる傾向にあると言える。

申請者は、先立って科学研究費補助金「淡路座を中心とする近世地方人形浄瑠璃芝居の、興行と上演作品に関する研究」(2004~2006年度、若手研究B)、「淡路人形座と大坂浄瑠璃界の交流に関する研究」(2009~2011年度、若手研究B)、「人形浄瑠璃史における淡路座」(2012~2014年度、基盤研究C)に取り組み、従来人形浄瑠璃史において等閑視されてきた淡路座(大坂初演の作品を携えて全国を巡業したプロの劇団。江戸時代には淡路島内に常時20ほどの座があった。座本の仲間組織を作って連携し、大坂の浄瑠璃界とも交流)を研究対象として取り上げ、その遺産の整理・分析に努めてきた。その過程で、淡路座が大坂(大阪)で途絶した作品(作品中の段を含む)・芸(舞台演出を含む)の多くを近代まで伝承したことを知り、翻って今日の文楽ではそうした多くの作品・芸を失ってしまっていることを痛感した。こうした伝承の喪失は、必ずしも自然な淘汰によるものではなく、主に文楽座をめぐる外的環境の変化によるものと思われる。

また申請者は、勤務先の大阪市立大学で、2006年より毎年「上方文化講座」という文楽の公開講座を担当し、そこでは文楽現行演目を取り上げ、現在に至る上演史を視野に入れた考察を加えた上で、文楽技芸員へのインタビューを行ってきた。本講座を通じて現在の文楽に直接接触を重ねる中でも、人形浄瑠璃文楽の研究において、今日までの伝承過程を解明することは喫緊の課題であると実感される。講座内容については二回分を書籍化(共編著『上方文化講座 菅原伝授手習鑑』『上方文化講座 義経千本桜』和泉書院)しているが、当該書において既にそうした問題意識から若干の考察も加えているところである(増補段の翻刻や、『義経千本桜』道行現行本文の成立についての考察など)。

そこで、近世以来の人形浄瑠璃上演史を精査しつつ、特に「上演本文」「舞台演出」の変遷を辿ることによって、具体的にこれまでどのように作品が舞台化されてきたのかを明らかにし、現行文楽の舞台が伝承の過程で失ったものを確認・再評価したいと考えた次第である。本取り組みは、伝承が途絶えてしまった演目や演出を復活させるための基礎となる研究である。先般雑誌『上方芸能』文楽特集号(193号、2014年9月)への寄稿(文楽は「見る」ものか? 「聞く」ものか? 観客の意識変化と今日の文楽)において、「何よりも文楽の古典を重視し、古典の潜在力を不断に掘り起こす公演」が必要であると説いたが、そのように述べたのは、芸の多様性を回復するような取り組みが、現在必ずしも十分にはなされていないと考えたからである。

## 2. 研究の目的

前項記述の問題意識のもと、本研究では大きく分けて以下の2点について研究を進めることを目的とする。

### 【 . 現行文楽に至るまでの上演本文の変遷に関する研究 / 現行上演本文の評価】

初演本文と現行本文が異なる演目について、現行本文が成立するまでの過程を明らかにして、現行本文に見られる改訂・増補・省略の意味を考察する。今日までの伝承者が所蔵した浄瑠璃本(丸本・抜本・床本)が主な調査資料である。また上演段の変遷を知るために、併せて興行記録の調査も行う。

### 【 . 現行文楽に至るまでの舞台演出の変遷に関する研究 / 現行舞台演出の評価】

過去の舞台演出に関する資料を収集し、現行演出が定着するまでの過程を明らかにするとともに、現行文楽とは異なる演出(舞台大道具、人形かしら、衣裳、演技等)を見出す。主な調査資料は、近世の絵尽、番付、浄瑠璃関係書、近代以降の大道具帳、劇評、記録映像、芸談等である。

また、以上 . の分析に基づき、本研究では現行文楽の本文・演出を評価するとともに、現行文楽にはない伝承の発見と、一部の復活を目指す。復活に当たっては、主に によって上演台本作成と段名・段構成の検討を、 によって演出(語り方・人形操法含む)の検討を行い、年度ごとに一作品の復活プランの提示を目標とする。

## 3. 研究の方法

「研究の目的」欄に示した ・ の研究に取り組み、それぞれについて具体的には、各年度において次の作業を並行して行う。

- ・ 上演本文（浄瑠璃本・興行記録）の調査・分析／復活上演本文の作成
- ・ 舞台演出（絵尽・大道具帳・劇評・写真・映像・芸談等）の調査・分析／復活上演演出の演出の検討

研究成果は、作品研究、資料翻刻、興行記録紹介としてまとめることを目指す。その上で、

・ を総合した取り組みとして【復活上演】があり、年度ごとに一演目の上演プランの作成を計画する（淡路人形座 南あわじ市福良 の復活公演に協力する形で進める）。 ・ それぞれについて、以下に詳述する。

#### 【 ・ 上演本文（浄瑠璃本・興行記録）の調査・分析】

##### (1) 浄瑠璃本の調査・分析

太夫や三味線弾き旧蔵の浄瑠璃本（丸本・抜本・床本・三味線譜本）を所蔵する代表的な機関として、大阪市立中央図書館、大阪音楽大学音楽博物館、早稲田大学演劇博物館、国立劇場、国立文楽劇場などを挙げることができる。また淡路座旧蔵の浄瑠璃本を所蔵する機関として、南あわじ市淡路人形浄瑠璃資料館、松茂町人形浄瑠璃資料館、兵庫県立歴史博物館が挙げられる。これらの機関の浄瑠璃本調査を適宜行って、文楽現行本文成立の過程をたどり、現行文楽では失われた伝承本文の発見に努める。

##### (2) 興行記録の調査・分析

人形浄瑠璃興行記録の調査・整理は、これまで申請者自身が代表者になって進めてきた科研費や、分担者として参加した基盤研究B「人形浄瑠璃文楽の近世期上演記録データベースの作成と活用・公開に関する基礎的研究」(研究代表者：神津武男)の中で取り組んできたが、伝承過程の解明のために、なお充実させる必要がある。大坂の劇場番付の新出を多く期待することはできないが、淡路座等による地方興行の記録をたどることは、別系統の伝承の発見につながる。従って、新出興行記録の発見・整理に努める。

#### 【 ・ 舞台演出（絵尽・大道具帳・劇評・写真・映像・芸談等）の調査・分析】

近世の絵尽や浄瑠璃関係刊行物、近代以降の大道具帳（明治期の大道具帳図版が『義太夫年表明治篇』に収録され、その原本の多くが国立文楽劇場に所蔵される）、『浄瑠璃雑誌』や新聞等に掲載の劇評、その他舞台写真や記録映画等からわかる過去の人形浄瑠璃舞台演出について調査・分析し、現行舞台演出の成立時期を確認して、現在は失われた舞台演出の発見に努める。淡路座に関する記録写真・映像は南あわじ市淡路人形浄瑠璃資料館に多く収蔵されており、これまでの科研費で調査を進めてきたが、なお詳細な分析が必要である。そこで、こうした各種資料の整理に努める。

## 4. 研究成果

「3. 研究の方法」欄に記載した ・ の作業を並行して進め、それぞれについて以下の成果を得た。

#### 【 ・ 上演本文（浄瑠璃本・興行記録）の調査・分析】

(1) 「浄瑠璃本の調査・分析」については、上に挙げた各資料所蔵機関の資料を調査し、いくつかの作品に絞り、伝承本文の変遷を辿った。これに関連する発表論文の番号（以下の「5. 主な発表論文等」記載の番号）を挙げると、 などである。

具体的に述べると、「菅原伝授手習鑑 比叡山の段」(文楽軒旧蔵本)解題と翻刻」では、大阪市立中央図書館に収蔵されている『菅原伝授手習鑑』増補物（比叡山柘榴天神の段など）の本文を調査するとともに、新たに大阪市立大学学術情報総合センターに収蔵された写本「菅原伝授手習鑑 比叡山の段」を比較・分析し、同写本を翻刻して、その解題を執筆した。「『大江山酒呑童子』(保昌屋敷の段)復曲演奏に関する覚え書き 文楽と淡路座の近代」では、文楽と淡路座双方の『酒呑童子話(大江山酒呑童子)』浄瑠璃本(床本)を調査し、その上演史について考察を加えた。「『大江山酒呑童子(酒呑童子話)』保昌屋敷の段・鬼が城の段(本文と略注)」も、これに関連する成果である。「浄瑠璃『二名島女天神記』の成立と伝承」では、淡路座の『二名島女天神記(宇和島天神記)』床本(南あわじ市淡路人形浄瑠璃資料館・兵庫県立歴史博物館・松茂町人形浄瑠璃芝居資料館蔵)を調査し、その成立と作品改訂(上演本文の変遷)について論じた。「淡路座の『仮名手本忠臣蔵』 現行文楽との相違とその価値」では、文楽と淡路座双方の『仮名手本忠臣蔵』上演本文(特に三・五段目)を調査し、舞台演出の変遷と合わせて検討することによって、淡路座に伝承された上演本文・舞台演出の価値を明らかにした。

(2) 「興行記録の調査・分析」については、新たに淡路座の近代の興行記録を調査し、徳島市史編さん室所蔵の人形浄瑠璃関係新聞記事スクラップ(徳島資料台帳)から淡路座(一部阿波や、その他の座も含む)の興行に関する記事を抜き出して、「明治から昭和初期の淡路座興行記録 徳島の新聞記事より」にまとめた。また においては、人形浄瑠璃の地方興行記

録（淡路座など）を分析し、地方に残った伝承の価値について論じた。その他、今回の興行記録調査・整理の成果を、  
各論文に盛り込んだ。

#### 【 舞台演出（絵巻・大道具帳・劇評・写真・映像・芸談等）の調査・分析】

各資料の調査を進め、例えば「淡路座の『仮名手本忠臣蔵』 現行文楽との相違とその価値」では、淡路座の公演記録写真（南あわじ市淡路人形浄瑠璃資料館蔵）や『浄瑠璃雑誌』の劇評記事を資料として、舞台演出の分析を行った。また、これらの資料を活用して、後述する復活公演の上演プランを作成した。

以上 の作業を並行して進めることにより、具体的にいくつかの作品で「上演本文」「舞台演出」の変遷を明らかにし、現行文楽の舞台が伝承の過程で失ったものを確認・再評価することができた。には触れなかったが、これらは の作業に関連する形で行った作品研究（ ）と芸能興行史に関する考察（ ）である。

また、計画の通り、淡路人形座の復活公演（文化庁の補助事業によって行われるもの）に協力し、年度毎に一作品の上演プランを作成した。具体的には、2015年度『日高川嫉妬鱗』天田堤より渡し場の段・道成寺の段（2015年12月19日上演）、2016年度『播州皿屋舗』青山館の段・忠太物狂の段（2016年12月17日上演）、2017年度『賤ヶ嶽七本槍』左馬之助湖水渡りの段（2018年1月28日上演）、2018年度『妹背山婦女庭訓』道行恋苧環（2019年2月17日上演）の上演台本・演出プランを作成した。各演目の復活方法・資料については、各公演パンフレットに詳細を記した。

以上、 、及び復活公演に取り組み、それぞれについて成果を挙げたことによって、当初の目的は達成したものと考えている。

## 5 . 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計10件)

- 久堀裕朗、「菅原伝授手習鑑 比叡山の段」(文楽軒旧蔵本)解題と翻刻、文学史研究、査読無、第59号、2019年、pp.68-74
- 久堀裕朗、近松浄瑠璃における作品構想の連関 『堀川波鼓』『松風村雨束帯鑑』『鐘の権三重帷子』を例に、歌舞伎研究と批評、査読有、第60号、2018年、pp.48-62
- 久堀裕朗、『大江山酒吞童子』(保昌屋敷の段)復曲演奏に関する覚え書き 文楽と淡路座の近代、2017年度「研究科プロジェクト推進研究」成果報告書『伝統芸能の近代化とメディア環境』、査読無、2018年、pp.1-14
- 久堀裕朗、『大江山酒吞童子(酒吞童子話)』保昌屋敷の段・鬼が城の段(本文と略注)、2017年度「研究科プロジェクト推進研究」成果報告書『伝統芸能の近代化とメディア環境』、査読無、2018年、pp.17-33
- 久堀裕朗、明治から昭和初期の淡路座興行記録 徳島の新聞記事より、2017年度「研究科プロジェクト推進研究」成果報告書『伝統芸能の近代化とメディア環境』、査読無、2018年、pp.34-50
- 久堀裕朗、浄瑠璃『二名島女天神記』の成立と伝承、国語国文、査読有、第86巻6号、2017年、pp.481-493
- 久堀裕朗、淡路座の『仮名手本忠臣蔵』 現行文楽との相違とその価値、歌舞伎研究と批評、査読有、第57号、2016年、pp.66-82
- 久堀裕朗、人形浄瑠璃における地方伝承の価値 淡路座の事例を中心に、飯田市歴史研究所年報、査読無、第14号、2016年、pp.93-102
- 久堀裕朗、道頓堀の人形浄瑠璃興行に関する覚え書き 豊竹座・陸竹座の変遷について、文学史研究、査読有、第56号、2016年、pp.140-158
- 久堀裕朗、浄瑠璃『近江源氏先陣館』『近江源氏 太平頭鑿飾』の構想一実録『厭蝕太平楽記』との関係と両作の世界設定、文学(岩波書店)、査読無、第16巻4号、2015年、pp.143-160

### 〔学会発表〕(計2件)

- 久堀裕朗、文楽と淡路人形芝居の近代、公開報告会・演奏会「伝統芸能の近代化とメディア環境」(大阪市立大学学術情報総合センター)、2018年
- 久堀裕朗、浄瑠璃『近江源氏先陣館』『太平頭鑿飾』の作意、京都近世小説研究会、2015年

### 〔図書〕(計1件)

- 藤原英城・野澤真樹・母利司朗・久堀裕朗(京都大学文学部国語学国文学研究室 編) 臨川書店、『京都大学蔵 頼原文庫選集』第1巻、総ページ数482頁(担当pp.319-434,475-482)

### 〔その他〕

ホームページ等

2017年度「研究科プロジェクト推進研究」成果報告書「伝統芸能の近代化とメディア環境」

## 6 . 研究組織

### (1)研究分担者

なし

### (2)研究協力者

研究協力者氏名：中西 英夫（前 南あわじ市淡路人形浄瑠璃資料館館長）

ローマ字氏名：NAKANISHI HIDEO

研究協力者氏名：坂東 千秋（淡路人形座支配人）

ローマ字氏名：BANDO CHIAKI

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。